

〈主な内容〉	■ 畜産研究所2名が同時に全国表彰	・・・1ページ
	■ 吉村知事を迎えて「つや姫」「雪若丸」の田植えを行いました	・・・2ページ
	■ 大規模経営体の収益性を高める作業技術体系の確立	・・・3ページ
	■ 大豆灌水システムに基づく灌水効果の現地実証	・・・4ページ
	■ 食品加工支援ラボ加工技術研修会	・・・5ページ
	■ 若手研究員からの一言メッセージ	・・・6ページ

## 畜産研究所2名が同時に全国表彰！！

阿部 正博氏「令和4年度畜産研究功労者表彰（全国畜産関係場長会）」

渡部真理安氏「第57回優秀畜産技術者表彰（公益社団法人畜産技術協会）」



渡部真理安氏と阿部正博氏

全国畜産関係場所長会の「令和4年度畜産研究功労者表彰」において阿部正博副所長が、公益社団法人畜産技術協会の「第57回優秀畜産技術者表彰」において渡部真理安主任専門研究員がそれぞれ受賞しました。

2つの表彰式は、令和5年6月20日に東京都内の全国家電会館にて行われました（写真）。このうち、畜産研究功労者表彰は「永年畜産の研究に従事して顕著な業績をあげ、畜産の発展に貢献した者」とされており、おおむね50歳以上の方が対象となります。

阿部副所長は、黒毛和種の育種改良、牛肉の理化学分析及び食味評価に関する研究に携わる中、全国に先駆けて黒毛和種の筋肉内脂肪の質に関する要因の解明に取り組んだこと、枝肉検体の採材技術・方法を確立したことにより、その後の脂肪の質に関する各種研究の礎となったこと、さらには肉用牛用の新飼料として膨潤発酵飼料の開発・実用化に関与したなどの功績が評価されました。

もう一つの優秀畜産技術者表彰は「畜産技術の研究、開発または優秀技術の普及、指導上顕著な功績を挙げた者、将来性に富み意欲ある優秀な中堅の技術者・指導者」とされており、おおむね50歳以下の方が対象となります。渡部主任専門研究員は、乳用牛のゲノミック評価を取り入れた乳用牛改良スピードアップを図るため、OPU<sup>\*</sup>技術及び体外受精卵培養に係る本県の畜産バイオテクノロジーの発展に寄与しました。加えて、OPU 技術普及に向けた新たな地域的取組が開始されるなど、その業績は山形県の乳用牛改良に大きく貢献した功績が評価されました。

※OPU（ovum pick-up；経膈採卵）

## 吉村知事を迎えて

# 「つや姫」「雪若丸」の田植えを行いました！



田植えをする吉村知事と相模小学校の児童

令和5年5月19日（金）、農業総合研究センター内の水田において、吉村知事とつや姫レディ、チーム雪若丸等で「つや姫」と「雪若丸」の田植えを行いました。

今年は、山辺町立相模小学校の5年生25人も田植えに参加しました。子供たちの参加は、新型コロナ禍の影響もあり4年ぶりとなりました。

参加者は、吉村知事から手渡された苗を持って水田に入り、子供たちのにぎやか歓声が響く中、秋には美味しい県産米ができることを願いながら、1株1株丁寧に植え付けました。

植え付けられた苗は、現在、すくすくと順調に育っています。当センターでは、「つや姫」「雪若丸」のさらなる評価向上につながる栽培技術の開発や食味向上技術の確立に取り組んでいきます。



田植えを指導する川崎専門員

# 大規模経営体の収益性を高める作業技術体系の確立 ～土地利用型作物部～

県内では、大豆などの土地利用型作物の大規模経営体が加速度的に増加しており、急速な作業面積の拡大により適期作業が困難な状況も見られています。一方で、水田活用直接支払交付金の交付対象の見直しを受け、5年間に一度、復田するための対応も急務となっています。

そこで、大規模経営体が抱える課題解決のため、今年度から「大豆の高能率作業体系の確立」、「小麦の高収益作付体系の確立」、「効率的な復田技術の確立」に関する研究に取り組んでいます。

大豆については、耕起、整地、播種の各作業において、従来より作業能率の高い機械を組み合わせた、高能率な作業体系の確立を目指しています。小麦については、播種時期や播種量の違いが生育に及ぼす影響を検討し、高収益な小麦生産につながる施肥体系を確立します。

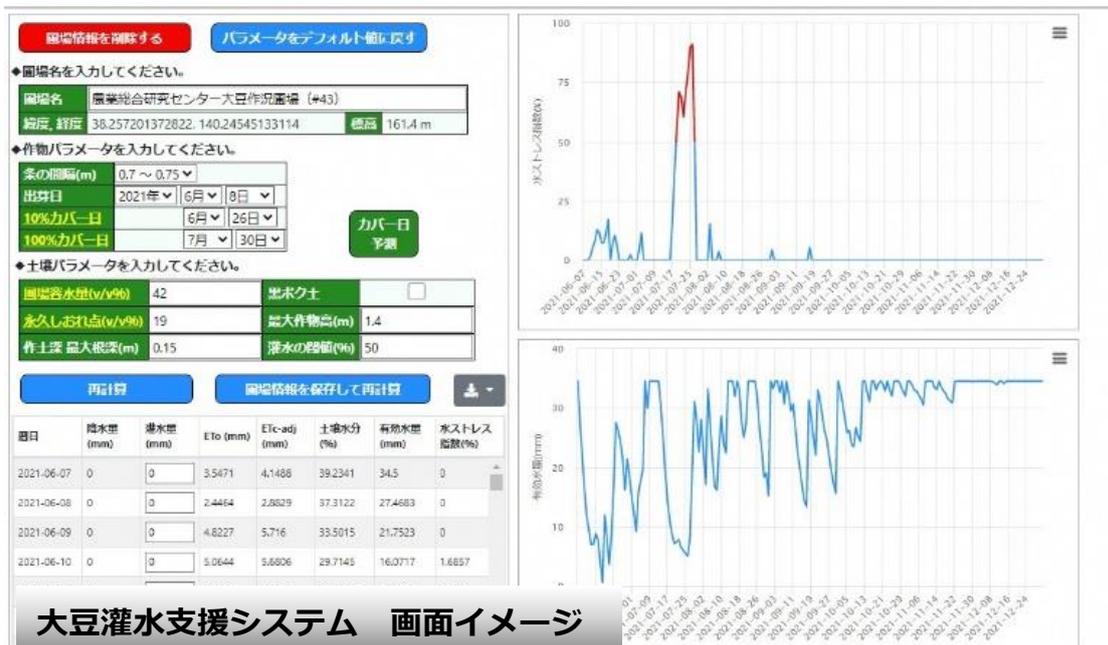
さらに、復田の円滑な実施に向け、耕起による耕盤復活技術や鎮圧による漏水防止技術などの開発に取り組み、本県水田農業の課題解決を進めて参ります。

開発した技術は、県庁の生産振興担当部署と連携しながら、研修会等で生産者に紹介するとともに、随時マニュアル化し、スムーズな普及・定着に向けて取り組んでいきます。



高速汎用播種機による大豆播種

# 大豆灌水支援システムに基づく 灌水効果の現地実証！～食の安全環境部～



本県において大豆は主要な転作作物として位置づけられていますが、近年の県産大豆の収量は全国平均を下回るなど低下傾向で、その要因の1つは、土壌の過乾燥です。大豆は7月下旬～8月上旬の開花期に水を多く必要とします。開花期前後に土壌水分が不足すると花や莢が落ち、収量や品質の低下につながります。しかし、生産現場では、大豆の開花期は水稻の出穂期と重なるため、水田への用水不足の懸念から干ばつ時でも大豆圃場への灌水をためらう事例が見られています。

食の安全環境部では、灌水の有無や灌水時期の違い（開花期 10 日前後）など異なる条件下での大豆の生育や収量を調査し、灌水による効果を検討します。また、農研機構が開発した「大豆灌水支援システム」（土壌乾燥時の灌水要否の判断を支援するツール）を用いた実証を行います。異なる土壌タイプの圃場で土壌水分を測定し、本システムによる推定値との差から本県における適合性を判断します。



畝間灌水の様子（水田農業研究所）

システムの適合性が実証できれば、灌水を必要とする場合のみに的確に灌水することで、過乾燥時の水稻との用水の競合が少なくなるとともに、大豆の収量・品質が高くなり、収益性の向上が期待できます。

# 食品加工支援ラボ加工技術研修会

## ～食品加工開発部～



たけのこ一次加工技術研修会

食品加工支援ラボでは、県産農産物を活用した加工食品の開発を支援するため、5月～12月まで毎月1回、「加工技術研修会」を開催しています。

本年度の第1回目は、要望が多いたけのこの一次加工技術をテーマに、5月16日(火)に開催しました。なるべく手間をかけない保存方法として、加熱処理後塩蔵する方法を紹介し、実習も行いました。塩蔵たけのこを使用したメンマ加工については、11月7日(火)の第7回目で取り上げる予定です。

去る6月6日(火)には、山形食品株式会社営業部次長の藤田直樹氏より、「山形代表」の開発経緯を例に、地元農産物を活用したモノづくりの考え方について御講演いただきました。パッケージデザインの決定やプロモーションの方法などについて活発な質疑応答が交わされたほか、その後のアンケートでは、「具体的なマーケティング方法や分析手法が興味深かった」などの声が聞かれました。

ラボ研修会では、当部で開発した加工技術も紹介しています。第2回目に、さくらんぼのセミドライ製造技術について情報提供したところ、受講者の関心は高く、他品種・品目への応用などについて質問が出されました。9月下旬には置賜地域を、10月中旬には庄内地域を会場に、ぶどうのセミドライ製造技術に関する研修会も開催しますので、関心のある方や商品開発をお考えの方はぜひ御参加ください。

【やまがたアグリネット】

今後も、ラボでは、米粉加工、干し芋加工、えだまめ乾燥加工などをテーマに研修会を開催する予定です。詳しくは、HPやまがたアグリネットのテーマ別情報>研修情報>をご覧ください。



## 若手研究員からの一言メッセージ



農業総合研究センター土地利用型作物部  
研究員 遠藤直輝

令和5年度新規採用職員として土地利用型作物部に配属となりました。現在は、大豆・小麦奨励品種決定調査、小麦「ゆきちから」の施肥体系、GNSS<sup>※</sup>を利用した大豆栽培技術に関する試験を担当しています。

大学では小麦に関する研究を行ってきたため、故郷である山形県で小麦の試験研究が続けられることを嬉しく思います。山形県は気候の影響で小麦栽培が難しい土地であり、どのようにすれば、収量・品質ともに向上できるのかを日々考えています。大豆に関しては、今まで携わってこなかったため、先輩職員の方々に1から教わりながら、不明な点は文献等を読み、知識・技術の習得に励んでいます。

毎日新しいことの連続で楽しく、時に戸惑うこともありますが、現場でどのような技術が求められているかを常に意識しながら、山形県の農業発展に貢献できるよう試験研究に取り組んでまいります。 ※GNSS (Global Navigation Satellite System) : 全球測位衛星システム

令和5年度新規採用職員として園芸農業研究所のバイオ育種部に配属されました。業務内容は、りんどうの県内民間育成品種の普及に向けた増殖や特性調査を行う委託試験や、奨励品種決定調査として、なす新系統の特性調査、食用ぎくやイチゴといった特産園芸作物の原種苗の維持・供給等を担当しています。

現在は、所内及び現地の圃場で栽培管理や調査を行ったり、研究室にこもってウイルス検定をしたりと、圃場と研究室を行き来する日々です。主担当の花きだけではなく、果樹など、幅広い作物・幅広い業務を扱うバイオ育種部での仕事は大変ではありますが、頼もしい先輩方のもと、様々な作物に関する知識や技術を学ぶことに楽しさと充実感を感じています。



園芸農業研究所 バイオ育種部  
研究員 桐原美結

大学では、全く違う分野を専攻していたため、花きに関してもバイオテクノロジーに関してほぼゼロからのスタートですが、常に鋭い観察眼と強い向上心を持ち、少しでも早く専門的な知識や技術を身につけられるよう努めていきます。